奈良教育大学紀要　第60巻　第１号（人文・社会）平成23年
Bull. Nara Univ. Educ., Vol. 60, No. 1 (Cult. & Soc.), 2011

異文化理解教育としての音楽鑑賞授業

－熊本県≪芳野の神楽≫と≪二瀬本神楽≫に対する批評の交流を通して－

宮　下　俊　也　奈良教育大学大学院（教職開発専攻）
佐久間　敦　子　熊本市立芳野中学校

（平成23年５月６日受理）

Music Appreciation Classes as Education for Intercultural Understanding －Through Exchange of Critiques on Kumamoto Prefecture *Yoshino Kagura* and *Nisemoto Kagura*－

Toshiya MIYASHITA
(School of Professional Development in Education, Nara University of Education)
Atsuko SAKUMA
(Yoshino Junior high school, Kumamoto city)
(Received May 6, 2011)

Abstract

The “Seoul Agenda: Goals for the Development of Arts Education,” a major outcome of UNESCO’s Second World Conference on Arts Education (2010), shows how arts education should be conducted in the future throughout the world. The following strategy is particularly noteworthy as perspectives that have been lacking in arts education in Japan: “Support and enhance the role of arts education in the promotion of social responsibility, social cohesion, cultural diversity and intercultural dialogue”.

Focusing on this strategy above, this study plans and puts into practice a specific example of a new kind of appreciation education for junior high school music classes. The aims and methods of this practice are based on the “Guidebook (junior high school edition) for New Music Appreciation Classes Incorporating Critiques－Discovering, Thinking, Creating, and Broadening Enjoyable Appreciation－.”

The lesson practice proposed in this study attempts to realize exchange between different cultures through music appreciation. Students from two junior high schools in Kumamoto Prefecture together watch performances of the *Kagura* music of their respective regions and then write critiques to convey to each other the distinctive characteristics of the music and what they felt about it.

Music appreciation education as a means of intercultural understanding and the writing of critiques on musicare methods that have been used before. However, there are not many actual examples of dialogue and exchange of critiques among people with different cultural background. As a more realistic method of educational practice in intercultural understanding in the field of music class teaching, the results of this project provide valuable suggestions for appreciation education in the future.

Key Words : music appreciation, criticism, intercultural understanding, *Kagura*

キーワード：音楽鑑賞，　批評，　異文化理解，　神楽

1．はじめに

1．1．研究の背景

2010年、ユネスコの芸術教育世界会議は、これからの芸術教育の世界的指針として「ソウル・アジェンダ」(Seoul Agenda: Goals for the Development of Arts Education)を提出した。その中で「社会や文化の健全性への貢献」（ゴール３のｂ)、「芸術教育による異文化理解や異文化交流」(同３ｃ)、「平和や世界的課題の克服への貢献」（同３ｄ）の３カテゴリーは、これまでの日本の音楽科教育に欠如している事項として認められる[1]。特に３ｃについては、新学習指導要領中学校音楽によって教科目標に音楽文化についての理解を深めることや、鑑賞領域の目標に多様な音楽のよさや美しさの味わいや理解を求めることとなったが、日常的な授業実践において「異文化交流」を具体的に実現させている例はこれまでほとんど見られない[2]。

一方、新学習指導要領では鑑賞領域に「根拠をもって批評するなどして、音楽の美しさを味わうこと」(中学校学習指導要領音楽、２内容、Ｂ鑑賞、（１）ア）が新たに示された。美学や哲学が規定する「鑑賞」の概念には「批評」が存在しているにも関わらず、我が国の音楽鑑賞教育においてこれまで批評を取り入れた学習が求められてこなかったことに対して改善が図られたものと評価できる。批評の実践は、平成20年１月の中央教育審議会答申、宮下(2006)[3]、(2010a)[4]、(2010b)[5]、(2011)[6]、宮下・岩田（2007)[7] による研究、『季刊音楽鑑賞教育』（公益財団法人音楽鑑賞振興財団）の発刊等の影響を受けて、昨今では多くの小・中・高等学校の鑑賞授業で活発に展開されてきている。しかしその実践には、批評文を書かせることが鑑賞指導の目的にすり替わっているものが多く見られ、児童生徒自身の音楽に対する批評的な思考・判断・表現の学力育成に貢献してはいるものの、批評の本来の意義である「作家と鑑賞者たちに指針と手がかりを与える活動」[8] になっていないものが多い。例えば、批評文を書かせるシチュエーションとして「この曲をまだ知らない人々に紹介文を書きましょう」という投げかけは頻繁に見られるが、実際に「まだ知らない人々」に発信して交流するという実践[9] はごく少なく、批評文を書かせるまでに留まってしまっている。

1．2．研究の目的

以上の課題を踏まえると、自文化としての音楽と他文化としての音楽をともに鑑賞によって批評し、批評の結果をもって「自分と異なる文化背景を持つ人間を相手に」[10] 交流することは異文化理解教育としての音楽鑑賞授業の具体的実践になるものと考える。また、音楽鑑賞における批評には、「音楽に対する認識」「音楽の文化的背景の理解」「音楽を創造する人間の感情や鑑賞した自分の感情の変化に対する思考」「価値判断」「批評文を生成するリテラシー」が必要となり[11]、それらは異文化理解教育として不可欠な「認知的局面」「感情的局面」「行動的局面」とその立体的作用[12] とも対応する。

そこで本研究の目的を次のように定めた。

２つの中学校において、それぞれの校区に存在する「神楽」を教材に批評を取り入れた鑑賞学習を行い、そこで書かれた批評文を交換し合い、寄せられた批評文をもとに他地域の神楽の特徴を理解する授業を計画し、実践と結果の分析を行う。その成果から得られた知見をもとに、批評の交流による異文化理解教育としての音楽鑑賞授業の在り方について示唆を提供する。

1．3．研究の方法

本研究は以下の手順と方法で実施する。（ ）内は遂行者。

①実施する授業実践の趣旨を、新しい音楽鑑賞教育の先行知見から定める（宮下)。

②熊本市立芳野中学校において、当地の神楽≪芳野の神楽≫と熊本県上益城郡山都町の神楽≪二瀬本神楽≫[13] を教材とする鑑賞授業を計画・実施する。その授業には次の活動を仕組む。≪芳野の神楽≫についての批評文を山都町立蘇陽中学校に発信し、蘇陽中生徒はその批評文を読みながら≪芳野の神楽≫を鑑賞し、批評文を書いて芳野中学校に返信する。また逆に、蘇陽中学校で≪二瀬本神楽≫を教材とする鑑賞授業を行い、そこで書いた批評文を芳野中学校に発信し、芳野中生徒はその批評文を読みながら≪二瀬本神楽≫を鑑賞し、批評文を書いて蘇陽中学校に返信する。それぞれの学校で返信批評文を読みながら、自分の地域の神楽を再鑑賞する[14]（佐久間）（表１)。

表１　授業実践と交流の流れの概略

芳野中学校	蘇陽中学校
❶≪芳野の神楽≫についての鑑賞学習。	❶≪二瀬本神楽≫についての鑑賞学習。
❷≪芳野の神楽≫についての批評文作成。	❷≪二瀬本神楽≫についての批評文作成。
❸批評文の発信。	❸批評文の発信。
❹蘇陽中生徒による≪二瀬本神楽≫の批評文受信と≪二瀬本神楽≫の鑑賞学習。	❹芳野中生徒による≪芳野の神楽≫の批評文受信と≪芳野の神楽≫の鑑賞学習。
❺≪二瀬本神楽≫についての批評文作成。	❺≪芳野の神楽≫についての批評文作成。
❻批評文の返信。	❻批評文の返信。
❼返信批評文の受信と≪芳野の神楽≫の再鑑賞。	❼返信批評文の受信と≪二瀬本神楽≫の再鑑賞。

③芳野中学校での実践を取り上げ、ワークシートの記述や批評文を分析する（宮下・佐久間)。

④実践と分析から得られた結果を基に、批評の交流による異文化理解教育としての音楽鑑賞授業の在り方について示唆を提出する（宮下）。

2．授業の趣旨

本実践は、先に宮下が開発した「批評を取り入れた新しい音楽鑑賞授業のためのガイドブック（中学校編）－見つけ、考え、生み出し、拡げる、楽しい鑑賞－」[15] の趣旨に即して計画した。その趣旨をここに整理しておく[16]。

このガイドブックにおける、これからの新しい音楽鑑賞学習のキーコンセプトは、「鑑賞」や「批評」の定義、それらの教育的意義、「ソウル・アジェンダ」に求められている世界における芸術教育の指針等を基に、①「創造的な鑑賞」、②「認識と自分の感情の変化」、③「作曲者・演奏者の創造意図や感情」、④「批評の能力の育成」、⑤「批評能力の社会的貢献」、⑥「楽しい鑑賞学習」としている。「見つけ、考え、生み出し、拡げる」も、鑑賞が能動的・創造的な活動として規定されていることに基づくものである。これらのキーコンセプトを鑑賞学習過程として構造化すると、図１のように表すことができた。

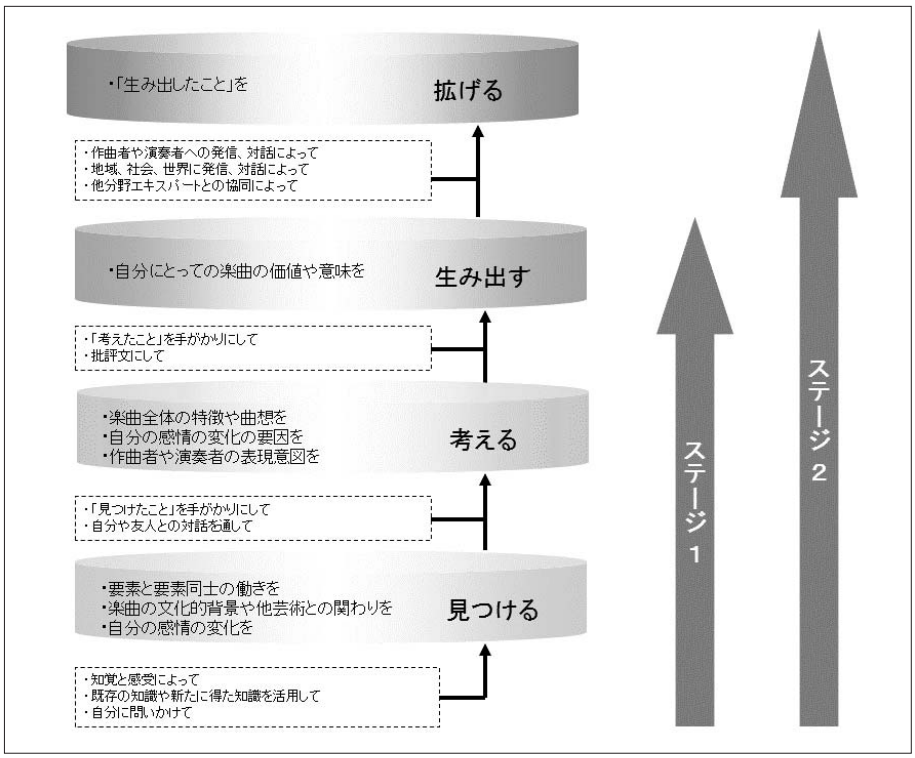


図１　新しい音楽鑑賞教育のコンセプトと学習過程のステージ

従前の音楽鑑賞学習や新学習指導要領で新たに示された批評活動は、図１におけるステージ１の段階までを求めているものとして位置付く。すなわち、音楽の要素や要素同士の関わり合いの知覚・感受と音楽の文化的側面の理解を基に、音楽を聴いた時の自分や音楽の創造者の感情を思考し、自分にとっての音楽の価値や意味を判断してそれを批評文として生み出す学習の過程である[17]。

一方、ステージ２は、生み出した批評の結果を他者に発信し、鑑賞によって音楽文化の創造や発展に寄与させる学習経験を求めるものである。その趣旨は、①事物や事象（芸術を含む）を鋭敏な知覚力によって認識し、質を思考し深く探索していくこと、思考や判断の結果を適切・建設的に主張（表現）できることを目指すこと、②自分にとっての楽曲の価値や意味を、クラスを超えた他者に伝える経験を与え、鑑賞による音楽文化の創造や社会的貢献を実感させること、の２点になる。例えば、現代音楽の鑑賞では、中学生が作品を批評し、その作曲者に批評の結果を伝えて聴衆の立場から音楽創造に貢献することを経験させたり、学校で聴いた音楽についてその批評文を家族に伝え、家族でその曲を鑑賞しながら、父母や兄弟姉妹が抱いたイメージと自分のイメージとの共通点や相違点を語り合ったりするような音楽活動を求める。本研究によって計画した神楽の鑑賞による交流は、このステージ２に相当するものである。

3．授業実践の結果

以下に本授業実践の計画と結果を示す。

表２　授業計画

題材名	私たちの町の伝統音楽（第２学年）	授業者	佐久間敦子
実践日	2011 年 1 月 19 日（1 時間）・1 月 24 日（1 時間）・1 月 31 日（1.5 時間）		
指導内容	・神楽の特徴とその文化的背景 ・他地域の神楽とその文化的背景		
教　材	・≪芳野の神楽≫ ・≪二瀬本神楽≫		
題材目標	1 神楽の特徴とその背景となる文化や生活との関わりを理解し、他の地域の中学生と鑑賞で交流することを通して、音楽文化の共通性や多様性に興味・関心をもって鑑賞する学習に主体的に取り組む。 2 神楽の特徴を知覚・感受し、自分にとってのその音楽の意味や価値を考え、他者に対して表す。 3 他の地域の神楽との共通点や相違点、固有性などから、音楽の多様性を理解して、そのよさを味わって鑑賞する。		

	評価の観点	評価規準	評価方法
評価計画	音楽への関心・意欲・態度	①神楽の音楽の特徴や、音楽と演技（舞）との関わりに興味・関心をもち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。	発話 観察 ＷＳ
		②他の地域の中学生と鑑賞で交流することを通して、文化の共通性や多様性を考えることに興味・関心をもっている。	観察 ＷＳ
	鑑賞の能力	①神楽の音楽の音色や旋律、リズム、速度の変化などを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取って、関連させて聴いている。	発話 ＷＳ
		②神楽の音楽の特徴と、神楽と地域の人々との関わりや神楽をとりまく現状などとを関わらせて聴き、自分にとっての神楽の意味を考え、他者に対して表している。	発話 ＷＳ
		③他の地域の神楽との共通点や相違点、固有性などから、音楽の多様性を理解して、味わって鑑賞している。	発話 ＷＳ

表３　学習指導の展開

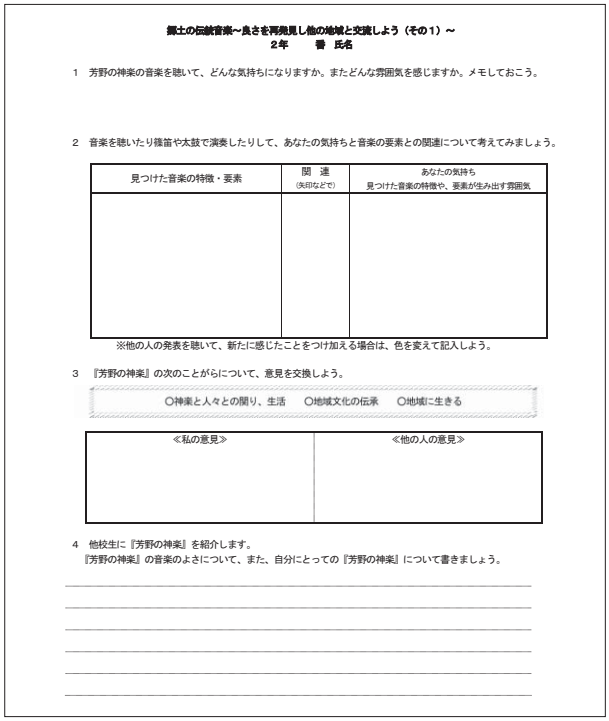
：見つける　：考える　：生み出す　：拡げる

指導事項		学習活動
教師の指示	指導のポイント	
1 ≪芳野の神楽≫の音楽を聴いて、音楽の特徴を捉える		
1-1「芳野の神楽の音楽を聴きます。いつもは神楽の舞を見ながらこの音楽を聴いていることと思いますが、今日は音楽だけに耳を傾けて聴いてみてください。」	・音楽のみをじっくりと聴かせ、曲の雰囲気を感じられるようにする。	・≪芳野の神楽≫より≪第１座かみ神楽≫を聴く。
1-2「どんな気持ちになりましたか。または、どんな雰囲気を感じますか？ WS（その1）の1に記入しましょう。」	・メモをする程度にして、1-3 の活動の参考にする。	・WS（その 1）の1に、気持ちや雰囲気を記入する。
1-3「となりの人と、意見を出し合ってみましょう。」		・ペアで意見交換する。
1-4「もう一度音楽を聴き、今度は音楽の特徴を見つけてみましょう。WS（その1）の2に記入します。」		・再度聴いて WS（その 1）の2に特徴を記入する。
1-5「特徴を確認してみましょう。」	・見つけた音楽の特徴を挙げさせながら、特徴を確認していく。 ＜主な確認内容＞ ・楽器…びょう打ち太鼓、締太鼓、鈴、神楽笛 ・構成、リズム、速度= はじめ（非拍節的部分・ゆっくり） なか（拍節的部分・速い） おわり（はじめと類似・非拍節的部分・ゆっくり）	・特徴を発表する。

2 ≪芳野の神楽≫の冒頭部分を、和太鼓と篠笛で演奏して音楽の特徴を捉える		
2-1「この音楽の冒頭の部分の和太鼓と篠笛をそれぞれ鳴らしてみましょう。」	・範奏（こども神楽保存会のメンバーによる）と一緒に、太鼓は手で机を叩く、笛は篠笛で吹くなどして、音楽の一部を体験することで、新たに音楽の特徴を見つけられるようにする。	・和太鼓と篠笛で演奏する。
2-2「和太鼓はリズムや音などにどのような特徴がありましたか？ WS（その1）の2に新たに見つけた音楽の特徴や感じた気持ち・雰囲気を記入しましょう。」		・WS（その 1）の2に特徴や気持ちを追記する。
2-3「篠笛は旋律や音などにどのような特徴がありましたか？」		・WS（その 1）の2に特徴や気持ちを追記する。
3 音楽から心に浮かんだ自分のイメージと音楽の特徴を関連させて聴き、述べ合う		
3-1「もう一度音楽を聴いてみましょう。最初にどんな気持ちになったかをメモしていますが、何か変化があるかもしれません。それを踏まえて、あなたの気持ちとこの音楽を形づくっている要素を関連させてWSの表にまとめてみましょう。矢印などを使って書き表してみようね。」	・最初にWS（その1）の1に記入した気持ちとの変化にも注目させながら、WS（その1）の2に記入させる。 ・関連させて表にまとめる際に矢印などを使い、複数にわたって関連しているときなどにも表記しやすいようにする。	・WS（その 1）の2に、特徴や気持ち、雰囲気の関連を記入する。
3-2「各班で発表し合おう。その際、他の人の意見を聴いて、なるほどと思ったことや、新たに思い浮かんだイメージや発見した特徴があったら、ペンの色を変えてメモしておこうね。」		・班で関連を発表し合い、他者の意見や新たな発見を追記する。
3-3「音楽を聴いて確かめてみましょう。」		・再度聴く。
4 ≪芳野の神楽≫が、この地域に住む人々の生活とどのように関わってきたかを考え、対話する		
4-1「≪芳野の神楽≫が、この地域に住む人々とどのように関わっているかを考えてみましょう。『総合的な学習』で『芳野の伝統芸能～神楽』の班が文化発表会で発表しましたが、もう一度、発表してもらいます。」	・「総合的な学習」の班に発表させ、成果を生かす。 ・芳野の神楽の歴史 ・神楽と人々との関わりや生活 ・小中学生の意識調査結果 ・神楽を伝承していくために　等	・「総合的な学習」で作成したパワーポイントのスライドや文化発表会の映像を見る。
4-2「それでは、班で次の3つの中からテーマを決めて、自分の気持ちや考えをWS（その1）の3に書いてみましょう。」 ・神楽と人々との関わり、生活 ・地域文化の伝承 ・地域に生きる	・班でテーマを決め、4-1 の活動を参考に考える。	・WS（その 1）の3に記入する。
4-3「班で意見を出し合ってみましょう。WS（その1）の3に、なるほどと思ったことはメモをしておくといいですね。」	・班員からいろいろな考えを聞き、さらに神楽への自分の考えを深められるようにする。	・WS（その 1）の3に記入したことを班で意見交換する。
4-4「現在芳野に住んでいる皆さんの神楽への思い、班で出された意見をいくつか聞かせてください。」		・班で意見交換したことを発表する。
5 ≪芳野の神楽≫を視聴し、自分にとって≪芳野の神楽≫の価値や意味を考え、紹介文を書く		
5-1「これまで学習してきたことをもとに、この≪芳野の神楽≫を他の地域の中学生に紹介しましょう。あなたが感じた≪芳野の神楽≫のよさを文に表し、しっかりアピールしてください。WS（その1）の4に書きましょう。」	・前時での音楽の特徴の知覚・感受や、本時での「総合的な学習」の班の発表、各班での意見交換などで得られた感情の変化を文に表しながら、自分にとっての≪芳野の神楽≫の価値や意味を考えて、批評文を「他校生へ紹介する紹介文」という形で書く。	・WS（その 1）の4に批評文（紹介文）を書く（下書き）。
5-2「書けたら隣の人と読み合わせをしてみましょう。新たに思いついたことがあれば、書き足してもいいですよ。」	・読み合わせる中で、新たに思いついたことがあれば書き足すようにして、自分の思いが伝わるような紹介文に仕上げられるようにする。 ・下書きができたらWSを回収し一人一人にアドバイスを行う。	・批評文の読み合わせと追記をする。

	＜アドバイスの主なポイント＞ ・≪芳野の神楽≫の音楽のよさを感じたことをわかりやすく書いているか。 ・自分にとって神楽はどんな存在か。 ・不適切な表現はないか。 ・漢字の間違い等はないか。	
5-3「WS（その1）の4で書いた内容をもとに、紹介ボード用の紙に本書きしましょう。タイトルは自分の文の内容に合うよう考えてつけてください。勿論、他の人と違ってもいいですよ。」	・紹介文に自分で考えたタイトルをつけることで、≪芳野の神楽≫に対する自分の思いが読み手により強く伝えられるようにする。	・批評文にタイトルをつけ、紹介ボードの貼り付け用紙に清書する。
5-4「書いた紹介文は紹介ボードに貼ります。」	・紹介ボードは、壁に立てかけても机に置いても読めるような大きさのものにする。	・批評文を紹介ボードに貼り付ける。
6　≪芳野の神楽≫を生み育んだ芳野地域の生活がわかるように、紹介ボードを作る		
6-1「さらに合わせて、芳野地域の紹介をしましょう。≪芳野の神楽≫を生み育んだこの芳野の生活がわかるように、『総合的な学習』の班に分かれて、学習したことの中から紹介したいことを考え、写真を交えながら簡単な説明文を作ってみましょう。」	・芳野神楽の生まれた背景の紹介をするために、「総合的な学習」の成果を活かして、文や写真で芳野地域の紹介を考えさせ、紹介ボードを作成させる。 ＜各班のテーマ＞ ・芳野の神楽 ・芳野の自然 ・芳野の農業、特産物 ・芳野の観光スポット ・芳野のお年寄りとの交流	・芳野地域を紹介する説明文を作る。
7　他地域の神楽≪二瀬本神楽≫の音楽を鑑賞し、≪芳野の神楽≫との相違点や共通点を見つけ、対話する		
7-1「熊本県と宮崎県の境にある蘇陽中学校の皆さんと鑑賞学習で交流します。まず、この地区にある二瀬本神社に伝わる≪二瀬本神楽≫を聴きましょう。どんな気持ちになるでしょうか。そしてどんな雰囲気を感じるでしょうか。WS（その2）の1に記入しましょう。」	・両校の教師が DVD や CD などを交換しておく。 ・メモをする程度にして、7-3 の活動の参考にする。	・≪二瀬本神楽≫を聴き、WS（その2）の1に、気持ちや雰囲気を記入する。
7-2「感じたことを紹介してください。」		・記入したことを発表する。
7-3「もう一度音楽を聴き、今度は音楽の特徴を見つけてみましょう。WS（その2）の2に記入します。」	・見つけた音楽の特徴を挙げさせながら、特徴を確認していく。	・再度聴き、WS（その2）の2に特徴を記入する。
7-4「特徴を確認しましょう。」	＜主な確認内容＞ ・楽器=太鼓、締太鼓、鈴、神楽笛 ・構成とリズム、速度など= 1の部分=非拍節的部分、ゆっくり 2の部分=2拍子、主に2音旋律の歌入り 3の部分=同じリズムの繰り返し、歌入り、速い	・記入した特徴を発表する。
7-5「あなたの気持ちや曲の雰囲気などを関連させて聴き、矢印などを使ってWS（その2）の2に記入しましょう。」		・再度聴き、WS（その2）の2に、特徴や気持ち、雰囲気の関連を記入する。
7-6「音楽の特徴など、芳野の神楽と違うところや似ているところがあるでしょうか。WS（その2）の3に記入しましょう。」		・WS（その2）の3に、相違点と共通点を記入する。
7-7「蘇陽中の皆さんが制作してくれた紹介ボードも参考にしながら、班で意見を出し合いましょう。その際、新たな発見があったらメモをとっておくといいですね。」	・生徒から出された意見より、音楽の多様性についても説明する。	・WS（その2）の3の記述を基に、班で意見交換する。
7-8「この神楽を育んだ蘇陽地域についても考え、『≪二瀬本神楽≫の音楽のよさ』について、WS（その2）の4に書きましょう。」	・これまでの学習をもとに、自分が感じる≪二瀬本神楽≫のよさについて書かせる。また、蘇陽中学校の紹介ボードから、神楽を育んだ蘇陽地域の自然や人々にも注目するように声をかける。	・WS（その2）の4に記入する。

7-9「2人で読み合い、話し合ってさらに2人で1つの批評文を書きましょう。蘇陽中の皆さんに送りますよ。」 7-10「書いた批評文は、ボードに貼りつけましょう。」	・ペアで批評文を読み合い、さらに対話をしながら2人で1つの批評文を作る。	・蘇陽中学校に送る≪二瀬本神楽≫の批評文をペアで作成する。 ・作成した批評文を紹介ボードに貼り付ける。
8　蘇陽中学校の生徒が書いた「≪芳野の神楽≫のよさ」の記述を読み、再度≪芳野の神楽≫を鑑賞する		
8-1「蘇陽中の皆さんが書いた『≪芳野の神楽≫のよさ』についての文章が届いています。それをプリントで配布しますので読んでみましょう。私たちが気付かなかった特徴やよさを発見してくれているかもしれませんよ。」	・自分たちが気付かなかった指摘について確認し合う。	・「≪芳野の神楽≫のよさ」のプリントを読んで、指摘されたよさを個人とペアで確認する。
8-2「蘇陽中の人たちが指摘してくれたことを確かめてみましょう。もう一度≪芳野の神楽≫を聴いてみましょう。この前のお祭りで、子ども神楽保存会の4人が笛、太鼓、舞をしているビデオを視聴します。ライブ録画なので、見に来ている人の様子も入っています。それも合わせて鑑賞してくださいね。」	・他校の指摘を確かめながら聴くようにする。 ・ライブ録画を視聴することで、神楽が地域の人々に親しまれ支えられていることや、神楽を見に来ることで地域の人々の交流ができていることなどについても感じ取ることができるようにする。	・≪芳野の神楽≫より≪第４座 しゃかき≫を視聴する。
8-3「まわりの人と感じたことを出し合いましょう。」	・意見を出し合い、対話をした後でWS（その2）の5に記入させる。	・視聴して感じたことについて対話し、WS（その2）の5に記入する。
9　音楽の多様性を理解して、両方の神楽を鑑賞し、≪芳野の神楽≫のこれからについて考える		
9-1「今回の学習で蘇陽地域の≪二瀬本神楽≫に出会い、再びこの≪芳野の神楽≫についていろいろ考えたことでしょう。学習のまとめとして、『≪芳野の神楽≫のこれから』について、あなたなりの考えを書きましょう。」	・あらかじめWS（その1）を配っておき、これまでの≪芳野の神楽≫についての自分の考えが、この学習によってどのように再構成されたかをそれぞれが感じられるようにする。	・WS（その2）の5に記入する。
9-2「今回、交流するためにいろいろと考え、何らかのかたちで地域の文化に携わっていこうとする気持ちをもって紹介文を書きましたね。このような行動でも十分、地域文化の伝承や創造に貢献していることにつながっていますよ。」	・今回の鑑賞学習による蘇陽中学校との交流が、お互いの地域の文化の伝承や創造に貢献することにつながったことを、生徒が書いた文章から拾い上げて、説明する。	



郷土の伝統音楽～良さを再発見し他の地域と交流しよう（その１）～
２年　　番　氏名

1　芳野の神楽の音楽を聴いて、どんな気持ちになりますか。またどんな雰囲気を感じますか。メモしておこう。

2　音楽を聴いたり篠笛や太鼓で演奏したりして、あなたの気持ちと音楽の要素との関連について考えてみましょう。

見つけた音楽の特徴・要素	関　連（矢印などで）	あなたの気持ち 見つけた音楽の特徴や、要素が生み出す雰囲気

※他の人の発表を聴いて、新たに感じたことをつけ加える場合は、色を変えて記入しよう。

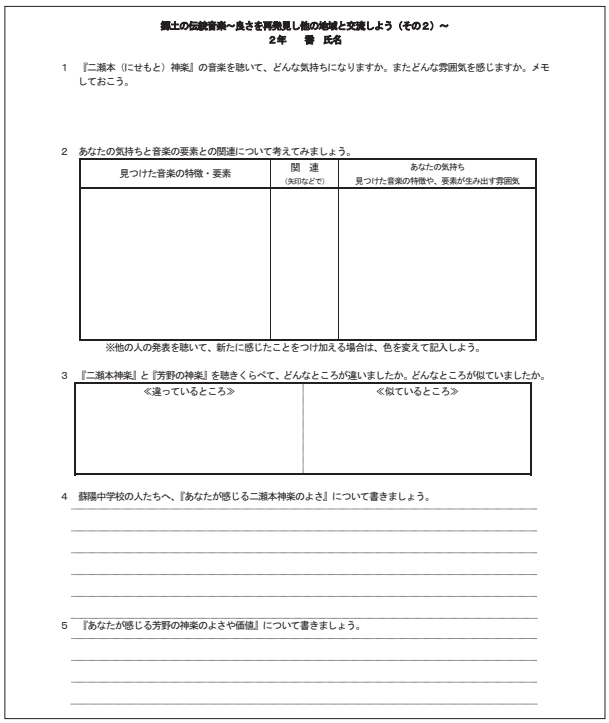
3　『芳野の神楽』の次のことがらについて、意見を交換しよう。

○神楽と人々との関り、生活　○地域文化の伝承　○地域に生きる

≪私の意見≫	≪他の人の意見≫

4　他校生に『芳野の神楽』を紹介します。
『芳野の神楽』の音楽のよさについて、また、自分にとっての『芳野の神楽』について書きましょう。

図２　ワークシート（その１）



郷土の伝統音楽～良さを再発見し他の地域と交流しよう（その２）～
２年　　番　氏名

1　『二瀬本（にせもと）神楽』の音楽を聴いて、どんな気持ちになりますか。またどんな雰囲気を感じますか。メモしておこう。

2　あなたの気持ちと音楽の要素との関連について考えてみましょう。

見つけた音楽の特徴・要素	関　連（矢印などで）	あなたの気持ち 見つけた音楽の特徴や、要素が生み出す雰囲気

※他の人の発表を聴いて、新たに感じたことをつけ加える場合は、色を変えて記入しよう。

3　『二瀬本神楽』と『芳野の神楽』を聴きくらべて、どんなところが違いましたか。どんなところが似ていましたか。

≪違っているところ≫	≪似ているところ≫

4　蘇陽中学校の人たちへ、『あなたが感じる二瀬本神楽のよさ』について書きましょう。

5　『あなたが感じる芳野の神楽のよさや価値』について書きましょう。

図３　ワークシート（その２）

4．結果の分析と考察

4．1．評価結果と結果

ここでは、生徒（全16名）が記述したワークシート（WS）を対象に行った観点別評価（「鑑賞の能力」）の結果を示し、記述の意味内容と照合させながら分析と考察を行う。

評価は、より客観性を持たせるために、指導者佐久間と宮下によって5ポイント（5＝十分に満足できると認められる、4＝おおむね満足できるもののうちより高い実現が認められる、3＝おおむね満足できると認められる、2＝おおむね満足できるもののうちやや低い実現が認められる、1＝実現が認められない）で行った。二人の間で異なる評価がなされた場合は平均値を取ることを合意して決定した[18]。

4．1．1．特徴の知覚・感受と感情・雰囲気との関連

まず、第1時で行った≪芳野の神楽≫の音楽について見つけた特徴や要素とそれらが生み出す雰囲気の感受及び自分の感情との関連と、第3時で行った≪二瀬本神楽≫の音楽について見つけた特徴や要素とそれらが生み出す雰囲気の感受及び自分の感情との関連を見つけ出す学習（表3の1−2～3−1、同7−1～7−5）についての評価結果を示す（表4）。評価の観点は表2の「鑑賞の能力」①である。佐久間と宮下の一致度は68.8%だった。

表4　特徴の知覚・感受と感情・雰囲気との関連結果

生徒名	≪芳野の神楽≫（WS（その1）の2）	≪二瀬本神楽≫（WS（その2）の2）
A	3　(3,3)	3　(3,3)
B	5　(5,5)	5　(5,5)
C	4　(4,4)	3　(3,3)
D	2.5 (3,2)	3　(3,3)
E	2　(2,2)	3　(3,3)
F	3.5 (3,4)	3　(3,3)
G	3　(3,3)	3.5 (3,4)
H	2.5 (3,2)	3　(3,3)
I	3　(3,3)	4　(4,4)
J	3.5 (4,3)	3　(3,3)
K	3.5 (3,4)	5　(5,5)
L	2　(2,2)	1　(1,1)
M	2.5 (3,2)	4　(3,5)
N	2.5 (3,2)	3　(3,3)
O	1　(1,1)	3.5 (3,4)
P	2.5 (3,2)	3　(3,3)
Mean	2.88	3.31
S.D.	.89	.90

（）内数値の左側は佐久間、右側は宮下による評定値

どちらも1名を除いて実現が認められた。また、一要因被験者内計画による分散分析の結果、有意傾向ではあったが、同じ内容の学習でも2回目の≪二瀬本神楽≫に対する学習の方が評価の結果が高かった（（$F_{(1,15)}=3.42$　$p<.10$）。

例えば生徒Kは、≪芳野の神楽≫について、「見つけた音楽の特徴・要素」では、「強弱：太鼓、鈴が強くならされている、音色：太鼓（締太鼓・びょう打ち太鼓）、鈴、速度：ゆっくり→速く→ゆっくり」のように記述し、そのうち強弱についてのみが「あなたの気持ち　見つけた音楽の特徴が生み出す雰囲気」欄に示した「力強い太鼓の音が迫力あるなあ」を矢印で関連付けていた。それに対し≪二瀬本神楽≫では、「全体的にゆっくりとした速度、太鼓や鈴の音色、歌の様式、太鼓のリズム」を特徴として見つけ出し、それぞれ「ずっしりとした感じ」「ゆったりとした雰囲気をつくり出す」「最初は不気味だけど後からはわくわくする感じ」と、具体的に感情を見出し、その要因となる特徴とを結び付けられるようになっていた。

≪芳野の神楽≫も≪二瀬本神楽≫も、どちらもそれぞれ中学生なら容易に知覚が可能な音楽的な特徴を持っているが、より≪二瀬本神楽≫の方が具体的に数多く見つけ出すことができ、また、自分の感情との結合も可能になっていることは、第1時でのペア学習（1−3）や全体での確認学習（1−5）が効果をもたらしたものと考えられる。

4．1．2．音楽的特徴の比較

次に、第3時で≪二瀬本神楽≫を聴いた後に≪芳野の神楽≫との特徴の比較を見つけ出す学習（7−6）についての評価結果を示す（表5）。評価の観点は「鑑賞の能力」③である。佐久間と宮下の一致度は93.8%だった。

表5　≪芳野の神楽≫と≪二瀬本神楽≫比較結果

生徒名	WS（その2）の3
A	3　(3,3)
B	3　(3,3)
C	4　(4,4)
D	3　(3,3)
E	3　(3,3)
F	3　(3,3)
G	3　(3,3)
H	3　(3,3)
I	2　(2,2)
J	3　(3,3)
K	3　(3,3)
L	3　(3,3)
M	3.5 (4,3)
N	3　(3,3)
O	3　(3,3)
P	3　(3,3)
Mean	3.03
S.D.	.37

（）内数値の左側は佐久間、右側は宮下による評定値

両神楽の共通点が無記述であった１人を除いて、他はすべて共通点、相違点ともに見つけ出すことができていた。ただし、「リズムや速度」「使われている楽器」のように、リズムや速度がどのように異なっていたのか、あるいはどちらの神楽にどのような楽器が使われていた（使われていなかった）のかといった具体的な特徴の知覚が不十分な記述や、それ以前に要素が生み出す質（雰囲気）の感受や自分の感情を要素と関連付ける学習がなされていたにも関わらず、客観的な共通点や相違点のみを記述した生徒が多かった。そのことにより評定5を得た生徒はいなかった。この点については、７－６の指導時にそうしたことも含めて共通点と相違点を考えさせる指示を与えなかったことが反省される。また、そうした指示や指導を行わないと、２つの音楽の共通点や相違点は、音楽の客観的な側面のみに注目して探してしまうことがわかった。

４．１．３．批評文の意味内容

続いて、本題材で書かせた３つの批評文を検討する。

４．１．３．１　交流前の≪芳野の神楽≫に対する批評文と交流後の≪二瀬本神楽≫に対する批評文

第１の批評文（WS（その１）の４）は交流前に≪芳野の神楽≫について書かせたもの（５－１）、第２の批評文（WS（その２）の４）は蘇陽中学校からの紹介文を読み≪二瀬本神楽≫を聴いて書かせたもの（７－８）であり、それぞれ書かせる前の学習内容を踏まえて蘇陽中生徒にあてた紹介文として書くように指示した。これらの批評文に対する評価の観点は「鑑賞の能力」②であるが、既習内容を踏まえた紹介文にすることを求めたことより、その実現を確認するために５つの下位観点「（ⅰ）音楽の仕組みの特徴について述べられているか」「（ⅱ）文化的背景の特徴について述べられているか」「（ⅲ）自分の感情の変化について述べられているか」「（ⅳ）自分が考えたよさについて述べられているか」「（ⅴ）紹介文として他者に伝える内容になっているか」を設定して評価した。この５観点は客観的に評価できるものであることから、実現されているものは＋、されていないものは－として佐久間が判定し、宮下が確認した。全体の評定は＋の数の合計とした。その結果を表６に示す。

表６　交流前の≪芳野の神楽≫と交流後の≪二瀬本神楽≫に対する批評文の評価結果

生徒名	交流前の≪芳野の神楽≫に対する批評文（WS（その１）の４）						交流後の≪二瀬本神楽≫に対する批評文（WS（その２）の４）					
	（ⅰ）	（ⅱ）	（ⅲ）	（ⅳ）	（ⅴ）	評定	（ⅰ）	（ⅱ）	（ⅲ）	（ⅳ）	（ⅴ）	評定
A	＋	＋			＋	3	＋	＋	＋	＋		4
B	＋	＋	＋	＋	＋	5	＋	＋	＋	＋	＋	5
C	＋	＋	＋	＋	＋	5	＋			＋		2
D	＋	＋	＋	＋		4	＋		＋	＋		3
E	＋	＋	＋	＋		4	＋		＋	＋		3
F	＋	＋	＋	＋		4	＋		＋	＋		3
G	＋	＋	＋	＋	＋	5	＋	＋	＋	＋		4
H	＋	＋	＋	＋		4	＋	＋	＋	＋		4
I	＋	＋	＋	＋	＋	5	＋	＋	＋	＋		4
J	＋	＋	＋		＋	4	＋	＋	＋	＋		4
K	＋	＋	＋	＋		4	＋		＋	＋		3
L	＋	＋	＋	＋	＋	5	＋			＋		2
M	＋	＋				2	＋					1
N	＋	＋	＋	＋		4	＋	＋	＋	＋		4
O	＋	＋	＋	＋		4	＋		＋			2
P	＋	＋	＋	＋	＋	5	＋	＋		＋		3
Mean						4.19						3.19
S.D.						.81						1.01

交流前の≪芳野の神楽≫に対する批評文では、「特徴となる要素の知覚・感受」（ⅰ）や「文化的背景の理解」（ⅱ）は全員が記述していた。また、「自分の感情の変化」（ⅲ）についても記述している生徒の方が有意に多かった（p＝.004，両側検定）。「自分が考えたよさ」（ⅳ）について記述している生徒も有意に多かった（p＝.021，両側検定）。一方、「他者に伝える内容」（ⅴ）が認められた生徒は8名に留まった。

交流後の≪二瀬本神楽≫に対する批評文では、（ⅰ）は全員が記述していた。（ⅱ）は半数、（ⅲ）（ⅳ）はどちらも記述した生徒が有意に多かった（（ⅲ）は有意傾向、（ⅳ）は p=.004，両側検定）。（ⅴ）は１名のみだった。

まず、交流前の≪芳野の神楽≫に対する批評文で評定５を得た生徒Ｇの批評文を見てみよう。

表７　生徒Ｇの批評文

芳野の神楽のよさは、太鼓や鈴、笛などが織りなす素晴らしい音色です。この音色を聴くと、ぼくはとても安心したような気持ちになれます。ぼくはこの芳野の神楽はどこの地域にも負けないくらいの素晴らしい神楽だと思います。 ぼくの故郷の神楽は全体的に大好きです。中でもぼくのおすすめは、きれいな鈴の音です。これを聴くと心が安らいだ感じになります。 でも、他の地域にもいろいろな神楽があるので、阿蘇の方にも個性があるのではないでしょうか。たくさんの神楽が日本にはあり、どの神楽も個性があります。人々のよき交流の場である神楽をなくさないよう、神楽の宣伝を頑張っていこうと思います。

この批評文において、（ⅰ）は、太鼓、鈴、笛等の音色とそれらの重なり合い（テクスチュア）に対する知覚・感受、（ⅱ）は、全国の他の地域にもいろいろな神楽があり、「地域により曲目、順序、舞い方に多少の異同がみられる」[19] ことや、「神楽は神に奉納するものであると同時に、村の人々をむすびつける働きを担ってきたもの」[20] という神楽の特色や継承されてきた背景を理解していたことがわかる。また（ⅲ）については、音色によって「安心したような気持ち」や「心が安らいだ感じになる」ことを述べている。以上のことと整合して「この芳野の神楽はどこの地域にも負けないくらいの素晴らしい神楽だと思う」と、自分にとっての≪芳野の神楽≫の価値を述べ（ⅳ）、「神楽をなくさないよう、神楽の宣伝を頑張っていこう」という決意を発信していることで（ⅴ）が認められた。

全体的に≪芳野の神楽≫についての批評文の評価が高かったことは、生徒Ｇに見られるように、前時までの学習と、本題材の前に行った≪芳野の神楽≫についての「総合的な学習」による学習経験の成果が反映されているものと考えられる[21]。

一方、交流後の≪二瀬本神楽≫に対する批評文で、（ⅱ）の文化的背景に対する記述が少なかったことは、「総合的な学習」によって理解が深まった≪芳野の神楽≫に比して、蘇陽中生徒の紹介文による情報しか得られなかったことや、鑑賞が映像ではなく、CDによる音楽のみであったことが影響していると考えられる[22]。舞や装束等を伴った総合的な伝統芸能である神楽を理解するためには、音楽以外のそれら等から継承のルーツや地域の特質との関わりを探ったり、実際の演奏を視聴したりすることによって実現されるものと考える。特に異文化としての芸術文化を理解するには、鑑賞者による紹介文や文献等の文字情報による知識としての理解だけでは限界があるとも言える。

しかしそれにも関わらず、（ⅳ）のよさについて考えられていた生徒が有意に多かったことには注目する必要がある。（ⅱ）（ⅲ）が認められなかった生徒Ｃと生徒Ｌの批評文を見てみよう。

表８　生徒Ｃの批評文

とても二瀬本神楽のリズムがよくて、テンポが遅くなったり速くなったり、たくさんの魅力があっていいと思いました。

表９　生徒Ｌの批評文

二瀬本神楽は明るくなったり暗くなったりして様々な音楽があってとてもおもしろいなあと思いました。そして芳野の神楽と違い、人の声が入っていたのもその神楽の独特なところでいいなと思いました。いつか二瀬本神楽を実際に見てみたいと思います。

これらは、リズムや「人の声が入っていること」に対してよかったと記述しているが、要素の働きに対する自分の感情や文化的背景の理解を総合して得られた批評の結果としてのよさなのかどうかは判明できない。批評の定義から導いた「音楽鑑賞学習における批評の構造」[23] に即せば、「音楽の認識」と「内部世界の生成」[24] を根拠に「価値や意味の探究」を行い、その結果として「よい」と判断されたものならば批評の結果として認められる。したがって生徒Ｃや生徒Ｌの記述は批評ではなく「感想」の域にあるものと言える。異文化理解教育としての交流においては、感想文ではなく「批評の構造」を満たした批評文による交流にならなければ、前述した「認知的局面」「感情的局面」「行動的局面」の「立体的作用」を果たす学習として期待できないものと考える。

また、（ⅲ）と（ⅳ）の間には中程度の有意な相関が認められた（r ＝.45 **）。つまり、自分の感情の変化を認識することが「よさ」といった価値の判断に影響をもたらしているものと言える。感動や豊かなイメージの創出

といった感情に関わる「内部世界の生成」が芸術の価値判断にとって重要な要因であること[25]がここでも確認できる。

（ｖ）については、ほとんど記述されていなかった。（ｉ）～（ⅳ）までは記述し、かつ（ｖ）も記述している生徒Ｂと、記述していない生徒Ｈの批評文を比較してみよう。

表10　生徒Ｂの批評文

二瀬本神楽のよさは、芳野の神楽にない「歌」や「リズム」がある事だと思います。歌が入る事によって明るく楽しめるし、リズムがのりのりになるのでよいなあと思いました。また、芳野の神楽と共通だと思った事は、たくさんの人々が関わって１つの『神楽』ができ上がっているという事です。たくさんの人々が関わらないと伝統は壊れてしまうので、地域の人々との協力と団結が必要だと思います。だからこれからも地域の人々と協力して生活し、二瀬本神楽のよさである「歌」と「リズム」、そして二瀬本神楽を支え続けている阿蘇の自然を守っていってほしいです。

表11　生徒Ｈの批評文

芳野の神楽と違って歌が入っている所があっておもしろいと思いました。また最後の方は一気にテンポが速くなって、聴いていて楽しく明るい気持ちになりました。似ていると思ったのは、使われている楽器が同じだと思いました。楽器も１つ１つの音がよく響いていて迫力がありました。また驚いたことで、二瀬本神楽は古くから残っていて、そこで神楽を行っているので伝統的でいいと思いました。

生徒Ｂは「だからこれからも地域の人々と協力して生活し、二瀬本神楽のよさである『歌』と『リズム』、そして二瀬本神楽を支え続けている阿蘇の自然を守っていってほしいです」という蘇陽中生徒に対するメッセージで締め括っている。またこのことの根拠になる内容がその前段に示されていて説得性を増している。このような「他者に伝える内容」が交流前の≪芳野の神楽≫に対する批評文に比して少なかったのは、単に書き漏らしたという推測の他に、（ⅱ）の文化的背景の理解と関係があるものと考える。つまり、よく理解された自文化としての≪芳野の神楽≫を発信することよりも、それより理解が浅かった異文化としての≪二瀬本神楽≫を理解して返信することの方が中学生にとって難しかったのではないか。このことは、（ⅱ）と（ｖ）の間に有意な弱い相関（ｒ＝.36 *）が認められたことからも考えられる。異文化理解としての交流においては、自文化、他文化ともにその文化の背景を深く理解することが求められよう。

４．１．３．２　交流後の≪芳野の神楽≫に対する批評文

第３の批評文（WS（その２）の５）は、本題材のまとめとして「≪芳野の神楽≫のこれから」について書かせたものである（９－１）。書かせる際には、あらかじめWS（その１）を配布し、これまでに学んだことや蘇陽中学校からのメッセージを踏まえて書くように指示した。よって、この批評文に対する評価の観点は「鑑賞の能力」の③であるが、その下位に（ｉ）「≪芳野の神楽≫のこれからについて具体的に記述されているか」、（ⅱ）「≪芳野の神楽≫についてこれまで学んだことや蘇陽中学校からのメッセージを踏まえているか」を設定した。この２観点について、これまでと同様に佐久間と宮下が５ポイントで評価し、その平均値を評定結果とした。一致度は40.6%だった。結果を表12に示す。

表12　交流後の≪芳野の神楽≫に対する批評文の評価結果

生徒名	交流後の≪芳野の神楽≫に対する批評文（WS（その２）の５）			
	（ｉ）		（ⅱ）	
A	4.5	(4,5)	4.5	(5,4)
B	4.5	(4,5)	4.5	(4,5)
C	4	(4,4)	4.5	(4,5)
D	1	(1,1)	5	(5,5)
E	4	(4,4)	3.5	(3,4)
F	4	(4,4)	3.5	(3,4)
G	4	(3,5)	3	(3,3)
H	4	(4,4)	5	(5,5)
I	5	(5,5)	4	(4,4)
J	4	(3,5)	3.5	(3,4)
K	4.5	(4,5)	3.5	(4,3)
L	4.5	(4,5)	4.5	(4,5)
M	3.5	(3,4)	4.5	(5,4)
N	5	(5,5)	5	(5,5)
O	4	(4,4)	4.5	(4,5)
P	4	(3,5)	4.5	(4,5)
Mean	4.25		4	
S.D.	.64		.87	

（）内数値の左側は佐久間、右側は宮下による評定値

全体的に（ｉ）（ⅱ）ともに高い評価が得られ、この学習の成果が認められたと判断できる。ともに５と評価された生徒Ｎの批評文を見てみよう。

表13　生徒Ｎの批評文

私は蘇陽中のメッセージを読んで、改めて神楽を大切にしているという事に気づきました。でも、地域の神楽を見た事がない人が見たいと思ってくれてうれしいです。私は、蘇陽中と交流をして、地域でそれぞれ神楽が違うことを改めて知りました。今まで、神楽を残さなければいけないと思っていたけれど、全く同じ舞や音楽、リズムの神楽が無いからこそ、これからに伝えていかなければいけないんだなあと考え直しました。

まず、「（芳野）地域の神楽を見た事がない人が見たいと思ってくれてうれしい」という記述から、自らの手によって発信した批評文により、自分の地域の文化が他の地域の人に理解された満足感がわかる。また逆に、「地域でそれぞれ神楽が違うことを改めて知りました」との記述から、「総合的な学習」で地域それぞれに異なる神楽が存在することは学んでいたものの、実際にその地域に住む人からその地域の文化を伝えられたことにより、真実性のある経験として知的な理解が促進されたものと考える。また、伝統文化の継承についても、単にそのことが重要であるという規範的な理解を超えて、「全く同じ舞や音楽、リズムの神楽が無いからこそ、これからに伝えていかなければいけない」という継承の理由がこの交流によって実感されたことがわかる。

継承については生徒Ｇの記述も具体的で興味深い。

表14　生徒Ｇの批評文

蘇陽中の人たちにぼくらの伝えたかったメッセージがきちんと届いてよかったです。ぼくもいろいろと学習して思ったのは、今、ぼくにもこの芳野の神楽を残す為に何かできる事はないのかと考える事が今回の授業を通して考える事ができました。この芳野の神楽を未来につなげていく為には、子供達に神楽のよさを知ってもらうしかやはり方法はないかと少し思いました。

生徒Ｇは、蘇陽中学校からのメッセージのほとんどが「子ども神楽」としての≪二瀬本神楽≫について書かれていたことから、「芳野の神楽の存続は子どもに伝えていくことである」という考えを述べている。他文化から影響を受けて自文化に貢献するための思考が促された例である。

また別の生徒Ｍも「芳野には紙や面は飾ってないので、他の地域の神楽も取り入れてほしいと思いました」と述べており、伝統にとらわれない新たな発想を提案している。これは思いつきで述べたものではなく、≪二瀬本神楽≫と≪芳野の神楽≫の舞台や装束を知覚・感受した上での思考であったことがわかる。

５．結論と今後の実践への示唆

本研究で得られた結論を、今後の異文化理解教育としての音楽鑑賞授業への示唆として以下に述べる。

第１は、異文化理解としての音楽文化の理解は、文字通り音楽の文化的背景の深い理解によって果たされることである。その時、音楽の文化的背景のみを切り離して知識として教えるのでなく、音楽の認識、すなわち音楽の諸要素や諸要素同士の関連に対する知覚・感受、イメージや感情の変化といった「内部世界の生成」、そして本実践では扱わなかったが表現領域の場合では「表現の技能」との関連を保って理解を図っていくことが求められる。

第２は、加えて、異文化となる音楽の文化的背景の理解は、その文化をもつ人々との交流によってより促進されることである。川那部（2006）は「異文化交流とは、つまるところ、いわゆる対人関係と変わりない」[26] と述べているが、本実践は批評文での交流であったがそれは批評文のやり取りを通しての対人関係であったと言える。だが、やはり対人関係を形成する場合、Face to face が最も有効であることは言うまでもない。特に音楽文化についての交流の場合、実際の演奏を生で聴き合ったり、音楽について同じ場で語り合ったりすることは必要なことだろう。それを日常的に実践するためには、メディアを用いたインターネット電話システム等の活用が効果的であると考える。

第３は、文化的背景の理解と、それを人に伝えたい欲求とは相関するということである。物事を深く知り得たことは人に伝えたくなるということと一致している、とも言えようか。異文化交流において前提となる自文化に対する深い理解、そして交流によってもたらされた新たな理解を得ることで、交流の持続発展が期待される。

第４は、批評文による交流についてである。本実践結果からも明らかになったように、相手に発信するための批評文は、その質が高いものでなくてはならない。質が高い批評文とは、音楽の認識（文化的背景の理解も含めて）や「内部世界の生成」を経て自分にとっての価値や意味の探究がなされ、その結果を根拠に価値判断され、それを的確に表現したもの（「音楽鑑賞学習における批評の構造」より）である。そうではないいわゆる「感想文」では、批評文を受けた人々に対して新たな認識をもたらすことはできない。また、鑑賞によって得られた「内部世界の生成」と価値判断は相関することも明らかになった。特に、中学生が音楽の価値判断を行うということは、感情の変化なくしてはできないものなのかもしれない。深い感動があればこそ音楽のよさを判断できる、深い悲しみを感じた時に、「この曲は自分にとって悲しさをもたらす曲だ」という意味付けや価値付けが正当にできるものと考える。また同時に、感情の変化は客観的な音楽の認識を根拠になされるものである。したがって、質の高い異文化交流に寄与する質の高い批評文の生成は、「音楽鑑賞学習における批評の構造」を確実に満たしていく音楽鑑賞授業実践によって果たされることが、ここでもまた確認できる。

６．おわりに

最後に今後の実践的な課題を述べる。

第１に、本研究では分析の対象にしなかったが、このような交流活動においては生徒の情意面が大きな影響をもたらすことが授業を通してわかった。芳野中生徒の多くは幼少の頃から地域との関わりが密で、地域の神社の祭礼等で神楽の存在は知っていた。それが基盤にあったことで神楽の文化的背景等を知ることに意欲が高まり、自分が住む地域に対するアイデンティティと結び付いて、他地域への発信に繋がった。批評文を送付した後、「早く返事が来ないかな」とか、返信を受けて「蘇陽中のみんなに芳野の神楽がわかってくれて嬉しい」といった発言や記述が見られたことからもそれがわかる。自文化や自文化を理解することに対する関心や意欲を喚起することは、異文化理解のための交流の前提として必要になるだろう。

第２は、授業時間やカリキュラムへの位置付けに対する現実的な課題である。本実践は音楽授業としては3.5時間を費やしたが、それに加えて「総合的な学習」で神楽を学んだことも成果に繋がっている。少ない音楽科の授業時数の中でこのような学習活動を行う場合、「総合的な学習の時間」や、「優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献する」[27] という内容を持つ道徳の時間を活用することで効果を上げるだろう。また、交流においては、蘇陽中学校教員との綿密な打ち合わせが必要だった。今後、国内のみならず海外との交流や、通信を活用したリアルタイムでの双方向授業を実施する場合も含めて、教員間の連絡・調整による共通理解は必要不可欠である。

注

（１）http://portal.unesco.org/culture/en/ev.php-URL_ID=41117&URL_DO=DO_TOPIC&URL_SECTION=201.html（2011年５月２日確認）。邦訳は宮下による（後掲書（６），pp.110-112に収録）。

（２）わずかな例として、インターネット電話システムを用いてハワイの学校とリアルタイムで交流した大阪府立夕陽丘高等学校における実践（坂本暁美（2007）「和楽器の授業において異文化の他者との交流活動が寄与するもの－ハワイとの音楽交流活動の分析を通して－」『学校音楽教育研究』，日本学校音楽教育実践学会紀要，第11巻，pp.79-80）があるが、これも日常的になされているものではない。

（３）宮下俊也（2006）「音楽鑑賞における『内的世界の生成』とその教育方法としての『対話』－高等学校芸術科音楽において－」『奈良教育大学紀要』第55巻，第１号，pp.135 - 145

（４）宮下俊也（2010a）「音楽鑑賞における批評の構造と思考過程の検討」『学校音楽教育研究』，日本学校音楽教育実践学会紀要，第14巻，pp.251-262

（５）宮下俊也（2010b）「感性育成のための指導指針－芸術鑑賞における批評を通して－」『学校教育実践研究』，奈良教育大学教職大学院研究紀要，第２号，pp.43-52

（６）宮下俊也（2011）「音楽鑑賞教育における批評能力育成プログラムの開発」，平成20～22年度科学研究費補助金研究成果報告書

（７）宮下俊也・岩田真理（2007）「音楽鑑賞における批評の教育的意義とそのアセスメント－高等学校芸術科音楽の授業実践と発話の解釈を通して－」『学校音楽教育研究』，日本学校音楽教育実践学会紀要，第11巻，pp.180-190

（８）佐々木健一（2006）『美学辞典』，東京大学出版会，p.217

（９）例えば、臼井学による実践「友と語り家族に伝える≪展覧会の絵≫」では、中学生が書いた批評文を家族に伝え、家族からそれに対するコメントを得る授業を行っている（前掲書（６），pp.240-247）。

（10）金沢吉展（1992）『異文化とつき合うための心理学』，誠信書房，p.76

（11）前掲書（４），p.257

（12）古田暁監修（1996）『異文化コミュニケーション［改訂版］新・国際人への条件』，有斐閣新書，p.257

（13）芳野中学校のある河内地域には、塩谷、中川内、白浜、船津、野出の各地区にある神社に奉納される神楽がそれぞれあり、芳野中学校では校区にある野出の神楽を教材として扱っている。教材名としては≪芳野の神楽≫とした。一方、蘇陽中学校の校区には「二瀬本神楽」という呼称の神楽があり、教材としてそれを扱っている。教材名としても≪二瀬本神楽≫として示す（河内町史編集委員会編（1987）『河内町史柑橘・民俗編』、蘇陽町誌編集委員会（1996）『蘇陽町誌 資料編』より）。

（14）芳野中学校は、島原湾に面した熊本市の山間部に位置し、蘇陽中学校は、宮崎県境に近い九州山地に位置する。両地域に伝承されている神楽は、同じ県であっても文化的背景や音楽的様式について相違がある。このことを本実践に先立って行われた「総合的な学習」によって学んだことにより、両地域の神楽はそれぞれにとって「異文化」であるものとして生徒は理解している。

（15）前掲書（６）の第二部。

（16）以下は、前掲書（６）の第二部より引用を含めて抜粋して示している。なお、本研究で扱う実践は、前掲書（６）のガイドブックにその構想に関わる概要が示してあるが、具体的な分析は本研究が初出となる。

（17）音楽鑑賞学習における批評の定義や教育的意義については、前掲書（４）に詳述されている。

（18）批評文の意味内容評価についての観点設定と評定方法は別に定めた。

（19）河内町史編集委員会編（1987）『河内町史 柑橘・民俗編』，p.710

（20）同上。

（21）「総合的な学習」では、次のことが行われた。①芳野の神楽の歴史と肥後神楽の関係を調べる。②他の地域（阿蘇）の神楽を視聴して、神楽の特徴（舞・音楽・楽器・道具など）を見つける。③芳野の神楽と人々との関わりを以下の方法で考える。

・小学生（４年生以上）、中学生にアンケートをとる。
・地域の神楽保存会の方々にインタビューをする。
・自治会長にインタビューをする。

④芳野地域の人々の暮らしと神楽との関わり、現状と問題点を考える。⑤神楽保存会の方々から生徒が神楽（笛・太鼓・舞）を習っている場面をビデオに収録して、神楽を受け継ぐことの実際を知る。⑥神楽の公演のポスターを作製して、小学校や地域の集会所等に掲示する。⑦校内学習文化発表会では、学習活動①～⑥のまとめの発表と神楽の実演を行う。

（22）≪二瀬本神楽≫については演奏の映像を視聴させることはできなかったが、その写真は蘇陽中学校から送られ、交流ボードに掲示して生徒は知ることができた。

(23)「音楽鑑賞学習における批評の構造」については前掲書（4）に詳述されている。

(24)「内部世界の生成」については、宮下俊也・岩田真理（2006）（「音楽鑑賞における『内部世界の生成』とその教育方法としての対話－高等学校芸術科音楽において－」,『奈良教育大学紀要』, 第55巻, 第1号）や、前掲書（4）を参照されたい。

(25) ヴェントゥーリ. L.（1990）『美術批評史』（辻茂訳）, みすず書房, pp.11-12

(26) 川那部和恵「異文化理解教育における実践的アプローチの可能性」『教育実践総合センター研究紀要』, 第15号, 奈良教育大学教育実践総合センター, p.55

(27) 中学校学習指導要領 道徳 第2内容4（9）より。